

## 「ロンディニウム」の楽しみ再び

安藤 晃二

先月ワシントンポスト紙の「一生に一度」級の考古学的発見という報道に目が止まる。ロンドンのサウスウォーク地区の建設現場から、少なくとも1,800年前のものと推定される古代ローマ時代の、類例のない大きさのモザイク床が二枚重なって出土した。言うまでもなく建設工事は中断、MOLA(ロンドン考古学博物館)の学者達が現場、に飛び込み第一報が流れ、興味が尽きない。暫くの間現場調査がおこなわれ、いずれは博物館に運ばれ公開展示されるという。

一世紀半ばから五世紀までローマが支配したブリタニアの首都はロンディニウム、現在のロンドンにおいては、工事現場からの歴史事物の出土は日常的であり、「やめてくれよ」と嘆く業者もあらばこそ、現場を取り巻く白塀に何か所かの見学用の窓が繰り抜かれ、道行く人々は好奇心を満足させる。40年程前、ロンドンに勤務した頃にも。シティの再開発工事現場にローマの市街が、そっくり出土した事があった。今回のサウスウォーク地区は、シティよりテムズ川を挿み南岸に位置し、南から通勤客が押し寄せるウォーターloo駅を中心に都会の工場群や低所得者層の集合住宅等がひしめく。件のモザイクは豪壮な大邸宅の食堂か、mansio と呼ばれた高位の市民の出入りするホールの床と見られ、良好な保存状態の二枚が重なった状態で発見されたのは、ローマが居た長期間に、床のデザインを流行に合わせて改築した事を物語ると考古学者は言う。この様な事物がロンドンの歴史を語るのだ。調査の詳細が待たれる。

ロンドン時代、ウィンブルドン辺に住んでいた私は、毎日ウォーターloo駅経由で通勤した。ウォーターlooと聞くだけで、当時の英国の古い車両のビロード椅子にしみ込んだ煙草の脂の強烈な匂いが蘇る。そして、あの映画 Waterloo Bridge (日本語名『哀愁』)に想いが至ると、数寄屋橋のメロドラマ処ではない、ウ"ィウ"ィアン・リー演じる女性の悲しい物語が迫り、古代ローマのモザイクの話にも空虚感が漂い始めるのだ。